

正しいテストの作り方～その2

先月に引き続き、学校の定期テストについて考察します。

では、具体的にどのように作問することが望ましいのでしょうか。

第一に考慮すべきは、生徒のレベル把握です。全く初対面の集団を相手にする場合は困難ですが、そうでない場合は、普段の授業や提出物を通じてどのレベルまでの問題を出してよいかを判断します。これを誤ると、得点分布が大きく崩れることになります。生徒の顔（反応）を見ないで黑板相手に授業をしている先生には、その集団にあった問題を作ることはできません。

第二に考慮するのは、試験範囲における重要課題の網羅とその出題方法の設定です。ここが配点全体の80%程度を占めるべきであるので、最も重要な過程になるはずですが、案外いいかげんな作問をされる先生も少なくありません。重要用語を問う設問が抜けていたり、逆に同じ事を何度も書かせたり、プリントから問題をそのまま切り貼りしたりなど、そのテストでいったい何を評価したいのかわからないものもあります。とにかくこの重要課題の内容は、できれば全員できて欲しい（現実には8割目標）項目ですから、ひねった問題である必要はありません。それでも設問の仕方を変えたり、選択肢を工夫したりするなどして、偶然や丸暗記だけではできないようにすることが重要です。

最後に考えるのは、全体の20%程度の「差を付ける（満点阻止）問題」です。最も手取り早いのは「記述式問題」を入れることです。用語は覚えていても、その意味や理由を理解できていない生徒は山ほどいます。ただ、これは採点基準をしっかりと設けて、全員を公正に評価する必要があるため、中学生のテストとしてはあまり多く出すことは困難です。他に教科書に載っていないか、授業中に教えた内容の設問などもよいでしょう。実験のときの色の変化や歴史上の人物の行動の意味など、教科書では削除されていても、知識の点と点をつなぐ事柄などは、テストに出すべきだと思います。そもそもその先生が教えた内容の定期テストなのですから、授業中に教えた事を出しても何の問題もないはず。「教科書に出ていない」と文句を言う生徒は、授業をしっかりと聞いていないことを告白しているようなものです。

また、時事問題と称して、最近起こった事柄を出すケースがあります。狙いは新聞やニュースを通じて、世の中のことに気を払って欲しいということでしょうが、どうも担当の先生の趣味嗜好で選ばれたような問題もあり、あまり多くの設問（配点）は避けて欲しいと思います。個人的には配点全体の5%（5問程度）が適切だと思います。

以上述べたことからわかるように、「テストを作る」という作業は、「生徒を教える」とと密接な関係にあります。しかし残念ながら「授業能力」と「作問能力」は別の能力であって、「よい授業をする先生のテスト」が必ずしもレベルが高いとは言いきれません。ただ、一方の能力が低ければ、もう一方の能力も頭打ちになることは自明のことです。教師たる者、いずれの能力も高める必要があるわけです。